

やまと 民俗への招待

扇子は、夏の外出時の必需品だ。蒸し暑く汗がにじみ出る時も、たちまち風を生み出し、一時の涼感を与える。团扇と違って携帯にも便利だ。

ヒノキの薄板をとじた桧扇は、8世紀中ごろに奈良の都で考案されたというが、この桧扇から発展したのが紙扇で、紙は初めは片側だけだったが、室町時代から両面に貼る現在の扇子になったといふ。涼風を送るだけでもなく、あいさつには扇興などの遊びにも用いられ、「投扇興」など遊びにも

なったが、民俗行事でも各地で見かける。

熊野那智大社(和歌

山県)で行われる火祭りは、正式には扇祭といい、金地に日の丸の扇を円形に組み合わせた独特の扇神輿が12体登場する。奈良市の猿沢池で行われる采女神社では、草花で作った花扇を御所車に乗せて巡行し、采女神社に奉納する。

神前に向かって扇を広げることは、奈良市水越神社の秋祭りで今も行われる。年長順に毎年12人ずつ務める渡御衆のうち4人が、白扇で舞台の床をあおいでから、開いた扇の

や太鼓などを置いてジンパ(神拝)を行う。

奈良市の丹生神社で

「横跳び」を行うが、



秋祭りで横跳びをする際、太鼓を扇であおぐ渡御者
奈良市の丹生神社で、筆者撮影

人と神々つなぐ道具

御所市鴨都波神社の御図絵馬(県指定有形民俗文化財)を見ると、江戸時代初期の祭礼渡

神社から神輿が出る時、人々は扇を振り上

げて、喚声とともに送り出している。神前で祈る時に、地面に扇を広げてひざまずく姿は『南都名所記』などの文献にも描かれてい

る。神前に向かって扇を広げることは、奈良市水越神社の秋祭りで今も行われる。年長順に毎年12人ずつ務める渡御衆のうち4人が、白扇で舞台の床をあおいでから、開いた扇の

や太鼓などを置いてジンパ(神拝)を行う。奈良市の丹生神社で「横跳び」を行うが、舞台に鼓など樂器を置き、扇であおいでから跳びまわる。この他子供の宮参りする時にも扇は登場する。採涼の道具としてもっぱら利用される以前、神に祈る時、祀る時、囁く時など広い儀礼の場で、神と人、そして人と人をつなぐモノとして扇は利用されてきた。

(奈良民俗文化研究所
代表・鹿谷勲)

|| 次回は24日掲載